コ　ト　ノ　ハ

佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コ　ト　ノ　ハ

【Ｎコード】
Ｎ００９３Ｎ

【作者名】
佳

【あらすじ】
大学院生の木幡幸≪こはた　ゆき≫は、指導教授に片想い。
しかし、彼には亡くなった妻がいた。
叶わぬ恋に悩む中、彼女はある学者について、学会誌用の記事を書くよう頼まれた。
その学者について調べていくにつれて、次第に２人の関係も思わぬ方向へと進んでいく。

プロローグ（前書き）

この作品は、拙作『雨音色』の続編です。
雨音色を読んでいただいた上で、本作を読んでいただければ、なお一層物語の意味を理解していただけると思います。
もちろん本作だけでも楽しんでいただけるようになっております。

プロローグ

「・・・壮介さん」

彼女は、聞きとれるか、取れないかの小さな声で、横たわる彼の耳元でささやく。
その声に、彼は閉じていた瞼を、そっと開いた。
そして、ゆっくり微笑むと、彼女の方を向いた。

「どうしました？」
「・・・雨が、降り始めました」

いつもであれば照りつけるはずの太陽は、雲で姿を隠し、
太陽の光の代わりに、空からはしとしとと雨粒が零れてきた。
窓から聞こえる、雨が叩きつけられる音。
彼女は、ただ窓の外を眺めながら、深くしわが刻まれたその手を、
彼の手の上に重ねる。

「あの日も・・・こんな風に雨が降っていましたね」

その言葉に、彼はくすす、と笑う。
その視線の先にあるのは、もうずっと昔に過ぎ去った日々。

「・・・そうですね。・・・貴女との思い出の日は、・・・いつも、雨が降っていましたね」

そっと彼が、反対の方へ顔を向ける。
視界の先に広がる世界。
窓ガラスをつたう雨水が、それはまるで涙のように、流れていく。
じんわりと外の世界が曇るのは、雨のせいなのか、それとも・・・。

「・・・時間が、・・・欲しい」

彼がポツリ、と呟く。

その言葉に反応するように、彼の手の上に重ねられた彼女の手が、ぎゅう、と力強く彼の手を握り締める。

「もっともっと、時間が欲しい。貴女と過ごす時間が」

定まらない焦点を抱える瞳が、激しく揺れていた。

「壮介さん・・・。時間なら、たっぷりありますよ。私はもう、どこにも行かないのですから」
「僕はまた・・・一人になってしまうのですね」

小刻みに震える声が、待っているだろう孤独をひどく恐れていた。

時は、待ってくれない。

それでも、心から願ってしまう。
永遠という幻を。

「でもね、・・・僕は、神様っているのかもしれないって、今になって思っているのですよ」

にっこりと笑うその笑顔に、彼女は遠い昔に見た、彼の笑顔を思い出す。
温かい瞳が見つめる先に、かつて自分がいた、その事実が、切ないぐらいに懐かしい。

「どうしてですか？」

彼はその問いには答えず、再びにっこりと笑って、彼女の手を握り返した。
深く刻まれた皺の数が、過ぎ去った時間の長さを物語る。

「僕が眠りにつくまで、・・・このまま手を握っていてくれません

か」
「えぇ。ずっと握っていますよ」

その言葉を聞いて安心したのか、彼は小さく息を吐いて、そっと目を閉じた。

雨の音が、次第にその激しさを増していく。

彼女も彼と同じように、そっと目を閉じた。
瞼の裏に映るのは、遙か昔、過ごした日々。

とても短い時間だった。
これまで生きてきた時間からすれば、ほんの一瞬のようなものだった。

それなのに、どれもキラキラと輝いていて、まるで昨日の出来事のようにさえ感じる。
ここに辿り着けるまで、片時だって忘れることは無かった。

「ずっと、ずっと、・・・握っていますよ。
・・・だから、壮介さん、・・・貴方も、私の手を、もう決して離さないでくださいね」

震える声に乗せられた言葉は、ただ彼の耳を掠めては通り過ぎていく。

雨の音に混じって、彼女の目尻から零れる涙が、ぽつり、と床に落ちた。
1つ零れると、その次も、その次も、零れ落ちていく。

「今度、生まれ変われることがあれば、きっと一緒になりましょう」

夏の空が、涙を零す。
それは、これまでの悲しみを、洗い流していくかのようだった。

――――どうして僕は、あの時、君を――――。

朝一杯のコーヒーと笑顔。

「おはようございます」

「在室」と書かれたプレートが掲げられたドアのノック音と同時に、彼女が彼の研究室に入ってきた。
それには、Ｈａｙａｓｈｉ，ｓ　ｒｏｏｍと書かれている。

「おはよう」

朝、８時４５分。

彼女は林の研究室にいた。

「コーヒー、ここに置いておきますね」

毎朝、一杯のコーヒーを先生の為に入れるのが彼女の役目。
正確には、彼女が勝手にやっていることなのだが。

「うん、ありがとう」

彼はいつものように優しく微笑むと、ぼさぼさのままの髪を掻きむしりながら、机の上を見回す。

アイロンがきちんと掛けられていないのだろう、ワイシャツのところどころが皺になっている。

「先生、ここです」

彼女が指差した先には、既に数冊の本と判例六法が１冊積み重なっていた。

「あぁ、ありがとう。いつもごめんね、木幡さん」

にこにこ、と笑顔を崩さないまま、彼はよいしょ、と掛け声とともに、それを両手で持ち上げた。
不満げな顔をしながら、彼女はその様子を見つめる。
不満げな表情―眉間に皺を寄せ、両腕を組み、鋭い目つきをして相手を見る―は、
彼女の癖であることは、４年目の付き合いになる彼にとって、既に慣れたものとなっている。

「それじゃあ、これから昼まで授業だから、それまでに論文上げといてくださいね」
「はーい」

両手に大量の本を抱えたまま、彼がドアを足で開けようとする。

急いで彼女が代わりにドアを開けた。

「ありがとう」

今朝だけで三度目の、穏やかで優しい笑顔。

「先生、鞄にでも入れたらどうですか？」
「ですよねぇ。僕もそう思うんですけど」
「持ちます」

彼女は彼に有無を言わさず、本の山の頂にある何冊かの本を取り上げ、彼の前を歩いた。
彼はありがとう、と呟き、にこにこと笑顔を浮かべて、彼女の後を歩く。

「ここからは、先生1人です」

彼女は持っていた本を、本の山に戻した。

「おっと」

よろけつつも懸命にエレベーターまで歩く後姿を途中まで見送って、彼女は院生専用の部屋まで来た。

まだ、誰も来ていない。

その中で、彼女はドアを閉めると同時に、大きくため息をつく。

「・・・はぁ」

そして急いで彼女は自分の眉間に両手を乗せて、懸命にそこを伸ばすのだった。

朝から、本当に朝から、コーヒーのカフェイン摂取より、刺激的なもの。

彼女にとって、それは林の「笑顔」だった。

朝一番に、誰よりも早くあの笑顔を見たい。

あの笑顔を見ると、目が覚めると同時に、今日も一日頑張ろうとい

う気になれる。

そう思って始めたのが、先生の為のコーヒー淹れ。
無類のコーヒー好きの林には、それはすんなり受け入れられた。
そして、1限目に授業がある日は、
教科書を山のように積み重ねて持っていく彼の為に、教科書を準備
しておいてあげる。
直ぐに、教室に行けるように。

自分は出来が悪いから、こういう風にしておくことで、
修士論文の審査を甘く・・・とか何とか彼女自身の中で理由をいく
つか考えてはみたが。

・・・とどのつまり。

「・・・やっぱり私、先生の事が好きなんだなぁ」

確かめるように独り言をつぶやいた。
気が付けば、片想いを初めてもう3年近く経つのかもしれない。

学部時代、ゼミの抽選で漏れて、泣く泣く入ることになった刑法ゼミ。

最初は刑法に興味がなくて、ゼミがつまらなかった。
ゼミ発表のため、いやいや触れていた刑法の世界に、いつの間にか魅せられて、
今では大学院にまで進学し、林の元で刑法を勉強している。
人生とは、いつどこで分岐点があるのか、本当に分からない。

「よし、・・・いっちょ推敲仕上げますか」

そう掛け声を上げて、彼女はパソコンの電源を立ち上げた。

お誘い

９時を過ぎると、何人かの院生が部屋に入ってきた。

皆と朝の挨拶と、２，３の言葉を交わしながら、彼女は論文を推敲する。

長い髪をゴムで１つにまとめ、パソコンの電源を入れる。

ＵＳＢメモリに大量に入った資料と格闘しつつ、試行錯誤を重ねていると、

気が付けば、１２時３０分を過ぎていた。

２限は１２時３０分に終了する。

普通であれば、学部の授業をする場所から、

この研究棟の法学部の階にエレベーターで上がってくるのに、

大体１５分から２０分ぐらいで到着するはずである。

しかし、彼女は時間を気にすることなく、判例集と睨め合いっこする。

彼が授業終了と共に教室を出てくることは無い。

彼は、ある意味、この大学に赴任して未だ４年目というのに、
既に名物准教授となってしまっている。

まず、延長は必須。
だからこそ、授業時間は昼休みに隣接する２限に行うよう、学事部の方が気を使っている。

次に、授業の分かりやすさ。
彼の授業だけは、刑法であるにもかかわらず、初回の授業では立ち見が出るくらいに混雑する。
回数を経れば、もちろん人は減るのが大学の授業だが、
それでも、彼の授業は、教室の席の９割が埋まってしまう。
空いているのは、最前列と最後尾のみ。
それだけ人気だから、その分、授業後に質問の列も出来る。

大学の授業で教授に質問、彼女も学部時代はあまりしたことが無かった。
大学の教授の授業は総じて面白くない。
だから、そもそも授業をろくに聞いたことなんかない。
――林先生の授業を受けるまでは。

院生の部屋の前を、誰かが通る足音がする。

それを聞いた瞬間、彼女は立ち上がり、急いでドアを開けた。

「先生！」

廊下に響き渡る声に、振り向く彼。

「木幡さん。論文できた？」

暑かったのだろう、額に汗を浮かせ、襟首のボタンが朝より１つ多く外されている。
その様子を見て、何故か彼女は恥ずかしくなって、目をそらす。

「あ、はい。とりあえず、データを移す形でも良いですか？」
「うーん。それでも良いけど、出来れば紙媒体の方が助かるかな」
「分かりました。コピーしておきます」
「うん、よろしくね」

会釈をして、彼女が元いた部屋に戻ろうとした時。

「あ、ねぇ、木幡さん」

「・・・はい」

急いでバックして、部屋から顔だけを覗かせた。

「お昼、食べた？」

「いえ、未だです」

「それじゃあ、食べに行きません？」

「え？」

「嫌？」

「あ、いえいえ、そんなこと」

懸命に頭を左右に振る。

「じゃあ、決まりですね。僕の部屋まで来てくださいね」

そう言って、彼はスタスタ自分の部屋に戻ってしまった。

「・・・っしゃ」

小さくガッツポーズをして、彼女は自分の手提げカバンから財布と携帯を取り出した。

林先生と二人っきりで昼食。
こんなチャンス、初めてである。
でも、どういうことなのだろう。

・・・考えても分かる訳がない。

とりあえず、心の中で万歳三唱をしつつ、
彼女はしっかりＵＳＢにデータを２度上書き保存をして、林先生の教室へと向かった。

Together・・・？

大学から少し歩いたところにある、小さな洋食屋。

店の名前はエリーゼ。

創業は大正時代にさかのぼるらしく、かなりの歴史を持っている、古い洋食屋である。

さすがに建物は新しくされているが、内装は昔とほとんど変わらないらしい。

アンティークの小物があちこちに飾られていて、中々風情がある。中には、近隣の大学の教授が、この店を気に入って、自分のコレクションを寄付したりする人が、後を絶たないそうだ。

味も一品で、昼時は店の外に長蛇の列ができてしまう。

彼らはその店内で、メニューとにらめっこをしていた。

「それじゃあ、僕は牛肉のバター煮のセットで」

「んー。それでは、私はハンバーグセット」

「・・・カニクリームコロッケのセットで」

テンションが低いのが一人。

「あれ？どうしたの、ここ、嫌でした？」

またもや彼女は不機嫌な表情をしていたらしい。
慌てて何とかその場を取り繕うとする。

「あ、いえいえ、とんでもないです。あの、大村先生と食事するって思うと、緊張しちゃって」
「あはは。何、そんな肩を張らなくても良いから」

目の前にいる、白髪交じりの教授。
鼻の下には、今時珍しい口髭。
夏目漱石のようなそれである。

緊張しているのは事実だった。

なぜなら、法学部の重鎮である、大村教授が彼女の目の前に座っているからだ。

しかし同時に、自分の読みの甘さに失望してもいるのである。

意気揚々と林先生の部屋に入ると、そこには見慣れてはいるものの、ほとんどしゃべったことのない大村先生が既にスタンバっていたのである。

「いや、ここでお昼ご飯とは、久しぶりだよ」
「時間を外さないと、凄く混みますからね」

2人が楽しそうに会話を弾ませている。
それもそのはず、2人は師弟関係にあるからだ。
ということは、彼女は大村教授の孫弟子にあたる。

内心では何度舌打ちをしたかわからないが、彼女は何とか笑顔を作って、林に尋ねる。

「ところで、どうして今日は3人でエリーゼに？」
「あぁ、そうそう。君の論文の事で、ね」

林が椅子に座りなおし、ずれ落ちた眼鏡を直した。

「君、共犯論と正犯論について考察しているでしょう。
やっぱり、その分野の先駆けの先生とは話しておかないと」

大村教授。
刑法学会において、有名な教授の一人だ。
特に、共犯論では学会の第一線を張っている人物で、
共犯に関する新判例が出ると、出版社からたくさんの解説の執筆依頼が来る。

「ははは。私なんて大したことないよ。いつも君が書く論文には驚かされてばかりだ」
「いえいえ。未だ未だ先生には及ばないですから」

師弟関係なのに、2人とも互いに腰が低い。

特に、大村は、授業で見せる顔とは全く違う顔を見せる。
授業では厳しく、試験も難しく、「鬼の大村」の異名を持っているのに、
授業から外れると、とても優しいのである。
大村は口髭を何度も触りながら、彼女に尋ねた。

「君は、今共犯について書いているんだってね」
「はい」
「論文は？」
「あ、さっきできたばかりなので、後で持っていきます」

印刷業務の1つ追加が決定した瞬間だった。

それに加えて、大村先生にまで論文を見られることになってしまった。
こうなることが分かっているなら、もう少しきちんと推敲しておくべきだったかな、
と内心後悔しながら、彼女は作り笑いを維持した。

切ない光

エリーゼのアンティーク小物の半分が大村のコレクションだったと言う驚きの真実を彼らが知った後、大村は出版社からの呼び出しのため、先に店を出て行った。

やっと二人っきりの帰り道。
嬉しいのやら、緊張するのやら。
彼女の内心は複雑だった。

「しかし、おいしいですよね、あそこは」
「えぇ。何食べてもはずれのないお店って、あそこぐらいしかないですよ」

その言葉に、嬉しそうに林が微笑んだ。
そして、その笑顔に、無意識に反応する彼女の心臓。
気がつかれないように息を整えて、彼女は言葉を続けた。

「しかし、大村先生に論文を読んでいただけることになって良かったです」

ドキドキしていることを気付かれないために、彼女は必死になって話題を変えた。

「えぇ。大村先生が認めてくだされば、後期課程も夢じゃありませんよ」
「・・・後期課程ですか・・・」

大学院の学生でも、後期課程に進むのは、ほんの一握り。
将来学者になる自信と才能がある学生でない限り、選ばない進路だ。

正直、彼女はそれを悩んでいた。

修士で止めて、就職を選ぶか。
博士課程まで進んでしまうか。

「大丈夫ですよ、木幡さんは才能あるから、心配しなくて」

ぽんぽん、と優しく彼が彼女の肩を叩いた。
また、どきっと彼女の心臓が高鳴る。

特別に彼女に向けられたものではないのに、
どうしようもない期待が彼女の胸を締め付ける。

そんな時、いっそ、この場で彼に愛を告白してしまいたい、と思ってしまう。

しかし、それを出来るだけの勇気は、彼女には無かった。
それをしてしまうことで、
築き上げた今の幸せを壊してしまうかもしれないリスクを、犯すことはできない。

そんな衝動に駆られる時、彼女はいつもすることがある。

それは、見つめること。

彼の左手の薬指に光る、銀色の指輪を。

――――叶わない、恋なのだから――――

きっかけ

それは、４年前のこと。

木幡は昼休みの時間に、林の部屋に呼び出されていた。
ゼミが始まって3カ月がたとうとする頃、彼女に順番が回ってきたからだった。

「木幡さん、次、よろしくお願いしますね」

林から、1枚のＡ４のコピーが渡された。
判例評釈のコピーである。

ゼミ発表の題材だ。

題材となる判例を中心に、
関連判例、学説を勉強し、分析し、それを皆の前で公表しなければならない。

くじで決められた順番で、彼女は最後から2番目だった。
そしてとうとう、2週間後に彼女の番が回ってくるのである。

「間接正犯だから、
共犯と単独正犯の境界線みたいなものをメインに案礼を検討してくれれば・・・」
「・・・間接正犯・・・」

去年、大村先生の授業で聞いた気がする。

でも、何だったっけ。

しかし、それが何であるかを聞く訳にはいかない。

一応、刑法を履修していて、

刑法のゼミ生であるにもかかわらず、基本概念を聞くのは、恥である。

「そう、間接正犯。共謀共同正犯との関係の一緒に考えてくれると良いと思いますよ」

にこ、と林が笑顔を浮かべる。

その笑顔に、いつも無性に木幡は腹が立っていた。

木幡は、林の笑顔が嫌いだった。

誰に対しても愛想を振りまいて、何がしたいのか。

だから、ゼミもほとんど聞いているだけで、ろくに予習をしたことなんかない。

来年は、どこのゼミの所属を希望するか迷っているぐらいだった。

「・・・はい」

ぶす、とした表情で、たった一言、そう答える。

彼女が彼に背を向けて、とぼとぼとドアに向かって歩き始めた時。

「あ、木幡さん」

彼が駆け足で近づいてきた。

「一応、藤木先生の論文からの考察もしてもらえると助かります」

藤木先生。

恐らく、あの藤木壮介の事を言っているのだろう。

戦後の刑法学会の第一人者の一人。

「・・・絶対縦書きだ」

横書きが主流の中、

昔の縦書きの本を読むのは、１．５倍の労力を消費しなければならない。

ため息をついて、廊下を意気揚々と歩く藤木の後姿を恨めしそうに見送りつつ、

彼女はその足でそのまま図書館へと向かった。

しかし、図書館に向かって真っ先に図書検索に掛けたのは、

論文集でも、藤木の古い教科書でもなく。

大村先生の基本書「刑法総論」だった。

大村先生の基本書は司法試験受験生でも定番の一冊であり、

学部生のほとんどもこれを使って勉強していた。

彼女が今、しなければならないこと、それは、基本概念を勉強することだった。

法律は、数学と同じで、公式なる定義を知らなければ何も始まらない。

そこで、彼女はまず、共犯に関する章の最初から読み始めた。
共犯、それは単に複数の者が一緒に犯罪を行うだけのように思えるが。

（・・・ふーん）

しん、と静まり返った図書館で、じっくりと教科書を読んでみる。

去年は、遊んでばっかりで、
ろくに勉強もせず、たいして教科書を読んでみたことは無かったが。

「・・・」

彼女の集中力が一気に高まっていく。
単純のように思われるのに、そこに巧妙に展開される理論。
構築されていく論理と、見えそうで見えない展望。
それがいかにして生の事案に生かされていくのか。

去年、友人に言われるがままに購入した判例集をめくりながら、ページを進めていく。

そして、気が付けば。

「・・・っ！」

腕時計で時間を確認すると、既に夕方の４時になっていた。
３時間以上も図書館で教科書を読んでいたのである。
次の授業があるため、そろそろ移動しなければならない。

（・・・刑法って・・・案外面白いのかもしれない）

彼女自身、かなり驚いていた。
一心不乱に、教科書を読みふけっていた事に。
未知の興味を抱きつつ、彼女はそれを抱えたまま、図書館のカウンターへと急いだ。

それから、２週間。
とうとう発表の日がやってきた。

いつもは最後の方にのそのそと入ってくる彼女だったが、その日だけは違った。
パソコンを用意し、スクリーンに接続の準備を行い、
簡単なレジュメを、それぞれの席に配って用意する。

何冊もの基本書に論文集、判例集を印刷した冊子。
最初に教室に入ってきた林も、驚いているみたいだった。

「これ、木幡さんが作ったのですか？」
「はい」

まだ発表していないのに、勝ち誇ったような笑顔。
その笑顔に思わず噴き出しそうになっていたのは、彼女には秘密にしてある。

「期待していますね」

そう一言、にこ、と笑って、彼は席に着いた。

ゼミが始まる。

林からの簡単な説明が終わった後に、木幡のプレゼンが始まった。
人前で発表するのは、嫌いではない。
緊張はするけど、特に臆することは無かった。

どうして緊張しないでいられるのか、尋ねられるが、彼女でもよくわからない。
性分、と言えばそうなのかもしれない。

プレゼンの構成はいたってシンプル。
判例の紹介に要点の説明、それに関する判例、学説の現状。
その後に質疑応答である。

彼女の通る声は、教室の最後尾にいる林の耳にも良く聞こえていた。
判例の説明が始まり、皆に配ったレジュメを元に、説明を展開していく。

そして、質疑応答。
その日は珍しく、議論が白熱した。
いつもは時間を繕う為に林がわざわざ何度も説明するだが、
その日だけは、彼の質問は1，2にとどまった。

そして、プレゼンが終了。
気が付けば、ゼミの時間は15分も延長されていた。
プレゼンが終わり、肩からふぅ、と力を抜いた。
彼女は自分の席に戻り、
パソコンを片づけ、資料をしまっていると、背後から彼女の名前を呼ぶ声がした。
振り向くと、そこにいたのは、林だった。

「お疲れさまでした」

にこ、といつもの微笑みで、彼女を見つめている。
何故か、その時は、彼女はその笑顔に、腹立つことは無かった。

「今日の発表は素晴らしかったです。たった2週間で、よくやりましたね」
「いえ。勉強してみたら、面白かったので」
「正直、意外でした」
「・・・え？」
「あぁ、いえ。・・・その、・・・刑法ゼミ、参加するのが嫌なのかと思っていましたので」

図星である。
大村先生ではなかったとはいえ、林准教授でも、刑法が苦手だったのは事実だ。
小難しいし、用語とか、意味が分からないし。

「その・・・。誰かが、言っていたんですか？」

恐る恐る、尋ねてみた。
ありうることである。
彼女はしょっちゅう、誰かに刑法ゼミに関して愚痴を言っていたからだった。
つまらない、先生の笑顔が癪に障る、眠くて仕方が無い、などなど。

「いえ、その。・・・あまり好きで参加しているという顔をされていなかったから」

態度で丸わかり、という事らしい。

今更ながらではあるが、彼女は恥ずかしくなった。

「あ、あの、先生」

「はい？」

恥ずかしさを隠すように、彼女は話題を変えた。

「先生って、今、刑法の授業を担当されていますか？」

突然の質問にきょとん、としながらも、直ぐに彼は笑顔になった。

「えぇ。春学期は刑法総論、秋学期は各論を担当する予定ですよ」

穏やかな微笑みだった。

その笑顔に、自身の視線が、吸い込まれそうになる感覚を、彼女は覚えていた。

そして、薄々ながらも、気が付き始める。

どうして、あんなに林の笑顔に腹が立っていたのかを。

「・・・こんど、聴講しても良いですか？」

くす、と彼が笑った。

「えぇ、是非。歓迎しますよ」

多分、そうなのだろう。

その和やかな笑い声に、優しい笑顔。

彼女が嫌いだったのは、それが・・・、彼女だけに向けられていないから。

つまり。

（・・・嫌い、じゃない・・・かもしれない）

君と夕食を、君と恋の相談を。

「・・・幸(ゆき)さん？」

その声に、はっと我に返る。
目の前には、待ち人が既に現れていた。

「待たせてしまってごめんなさい」
「ううん。全然待ってないよ」

そこは食堂だった。

約束の時間より早く来てしまった木幡は、
食堂の中の席に座って、ぼうっと窓の外に映る都会のネオン街を眺めていた。

毎週水曜日、彼女たちは一緒に夕食を取ることを約束している。

「もう食券は買いました？」

そう尋ねるのは、木幡の友人である中村珠美(なかむら たまみ)だった。
彼女は、学部時代からの木幡の親友である。
彼女も一緒に大学院に残った、数少ない友人の一人。

もっとも、専攻は木幡とは違って、憲法だった。

「まだ。一緒に買いに行こうと思って」

木幡も立ち上がり、２人は食券売場へと急いだ。

「おいしそうだね」

木幡が頼んだのは、ディナープレート。

５００円なのにもかかわらず、
メインディッシュが肉と魚から１つずつ選べ、
サイドメニューとして小鉢とサラダが付き、
主食であるご飯とお味噌汁ももちろんある、というかなりのお得なセットである。

一方、珠美はスパゲッティセットを頼んでいた。

今日はカルボナーラらしい。

２人は元の席に戻り、互いに向かい合って、食事を始めた。

「ところで、どうしてさっきはぼうっとしていたのですか？」
「うん、ちょっと、昔の事を思い出して」

木幡の表情が少し変わったところを、珠美は見逃さなかった。

「何を、思い出していたのですか」

少しためらったのだろう、
木幡はほうれん草のおひたしを少し口にすると、言葉少なに語り始める。

「初めて、刑法が面白いと思った時のこと」
「あぁ、ゼミでの初めての発表の時、ですか？懐かしいですね」

珠美は、その前から、何となく木幡の彼に対する感情は気が付いていた。

初めて会った時に、良さそうな感じがする、と話していたのだが、
次第に笑顔が嫌いと言いだす。

何故かと問えば、八方美人だから、とのこと。

しかし、嫌いと言う割には、林の話題が多いのである。

会うたびに、京のゼミで林の笑顔がいかにむかつくか、
何を言っていて、それがいかにむかつくか、等を報告してくるのである。

一見、彼女のそんな悪態からすれば、林は嫌な教授のように思える。
しかし、林の、皆からの評判は悪くない。
むしろ、大学内で、断トツで人気のある准教授として有名である。

では、何故嫌い嫌い、と文句を言っているのか。
よくよく考えてみれば、その理由は簡単だった。
いわゆる、「嫌い嫌いも好きのうち」というものである。
彼女の性格を考えてみれば、それなりに納得できるものだった。
木幡はあまり素直ではない。
好きなものを好きだと認めない傾向がある。
だから、彼女から林を好き『なのかもしれない』と告白された時も、
さして驚きはしなかった。
むしろ、驚かない珠美に、木幡が驚いていた。
「もう4年前のことなんて、信じられないですね」
「うん。今でもちゃんと思い出せる。すごく嬉しそうな顔をして、
褒めてくれた」
頬がほころんでいる。
今でも、彼女にとってはとても嬉しい思い出なのだろう。
そのゼミの発表以来からだった。
とっくに刑法の単位を修得済みなのに、木幡が珠美を誘って、刑法
を聴講し始めたのは。
珠美が休んでも、彼女は一人で聴講していた。
教室の最後尾の方で、真剣に。
「懐かしいですね」
「うん」

もう、あれから4年も経つのか、と珠美も感慨深くなる。
親友の恋を応援してきて、一向に実らないままだけど、それでも応援せずにはいられない。
何故かは、彼女自身も理解していなかったが。
「・・・本当、懐かしいなぁ」
ため息をつきつつ、木幡が昔を懐かしむ。
珠美は、今だと思った。
「・・・大丈夫ですよ。私はいつも、幸の味方です」
珠美以外の前では決して見せることのない、
自信のなさそうな笑顔を浮かべながら、彼女は呟いた。
「ありがとう」
笑顔に交る、悲しみと切なさ。
その理由を知っている彼女だからこそ、いい加減なことは言えなかった。
それを取り除くことができるのであれば、とっくにしてあげている。
「さ、ご飯を食べましょう。冷めますよ」
相談を受けた日からずっと続いている、何もできないもどかしさを

感じながら、
２人は箸を進めるのだった。

コーヒーの淹れ方、紅茶の飲み方。

食事を終え、２人で研究等へと戻る。
珠美もどうやら修士論文の草稿を提出するよう催促されているらしく、未だ帰れないそうだ。

木幡は荷物をそのまま置いてきてしまったのと、
先日の大村に渡す分の論文の原稿を印刷しなければならないため、
未だ帰れない。

「それじゃあ、お疲れ」
「幸、あんまり無理してはだめですよ」

いつも珠美は、別れ際に木幡を案ずるような言葉を投げかけてくれる。

生来のお節介の性分が出てしまうのだろうか。
でも、不思議にそれが、彼女にとっては心地よいものだった。

彼女に母がいないせいなのかもしれなかったが。

部屋へ戻る途中、林の部屋の前を通る。
ドアの上の天窓から、光が漏れている。

（今日はまだ帰っていないんだ）

学会用の論文を書いているのかもしれない、

そう思いながら、彼女は院生の部屋へと歩いて行った。

「林君」

ドアのノックと同時に、大村が林の部屋に入ってきた。

「はい」

その返事も待たず、ずかずかと彼の机の前に置かれた椅子に、どかっと座った。

「いやぁ、ちょっと触りだけ読んだけど、かなり興味深いね」

口髭を何度も撫でながら、彼は散らかった林の机の上に、論文の束を置いた。

「そうですか。僕は未だ読んでいないので」

「目の付けどころが斬新だ。さすが君の弟子、といったところだな」

「いえいえ。私の弟子、というより、彼女だからですよ」

彼は立ち上がり、コーヒーメーカーに手を伸ばすが、大村は顔を横に振った。

「構わんよ」

「あ、すみません」

満足そうな顔をして、彼は続ける。

「こんな逸材に出会えるとは、そうそうあることではない。この出会いは大切にしないといけないなぁ。そういう点で、君に出会えた私は、ラッキーだと言える」

「身に余るお言葉です」

苦笑する林に、なおも大村は言葉を続けた。

「しかし、よく彼女を大学院に誘う事が出来たな。今時、こっちに来る学生なんか少ないだろうに」

「ゆくゆくは行くと思いますよ。司法試験は、ロースクールを卒業しないと受験できませんし」

法学部の教授でも、司法試験を受験していない者もいる。

もっとも、大村も林も、司法試験には受かっていた。

しかし、今は時代が違う。

司法改革のため、司法試験受験資格に、ロースクール卒業が加わってしまったのだ。

そのため、法学部の学生は進学したとしても、

ロースクールを選択するのが大多数で、従来の法学研究科に進学するのはごく一部だった。

「ほう、そうか。
でも、もし君の合理的思考からすれば、まずロースクールに進学するよう勧めるのではないか」

合理的に考えるのであれば、そうだろう。

稼げるかわからない方に進むより、
まず将来の仕事に直結する進路を選ぶように、彼はアドヴァイスするだろう。
しかし、彼は木幡にはそうしなかった。
むしろ、研究科に進むよう助言したのだった。

「初めて彼女がゼミで発表する機会がありました。
正直言えば、僕は彼女に期待していなかったのです。
ゼミでもあまり積極的ではありませんでしたし、むしろ居眠りしているようでしたし。
恐らく、ゼミ生であるにもかかわらず、最初は刑法の基本すらも分かっていなかったと思います」

くす、と林が笑う。

「初めてここで題材となる判例を渡した時も、不満げな顔をしていました。
きっと発表もそれなりの物になるだろうと予測していのですが。
・・・それなのにですよ、いざプレゼンとなったら、誰よりも綿密な検討をしてみせたのです。
良い意味で、僕の予想を大きく裏切ってくれました」

懐かしそうな眼をして、林は微笑んでいた。

その微笑みは、あの時彼女に送っていたそれと、変わらない。
「発表態度も素晴らしかったし、何よりも、あの短期間での成長。
僕は本当に驚きました。
こんなに凄い子が、近くにいたなんて」
彼は、目を細めた。
何か、眩しいものを見るときのように。
「彼女はまさしくダイヤの原石です。僕には、あの時以上に、今の
彼女が輝いて見えるんですよ」
自慢げにそう豪語する林の姿を、大村は嬉しそうに見つめていた。
と、その時。
とんとん、とドアをノックする音がした。
「はい」
「木幡です」
「どうぞ」
ぎぃ、とドアが開く音と同時に、木幡が現れる。
「あれ、大村先生、ここにいらしたのですか」
「私に用だったのかな？」
「はい、先日の論文の原稿を渡そうと思いまして」
「あぁ。実はね、ちょっともうつまみ食いしてしまっているのだよ」
大村がぎゅ、と肩目をつぶる。
ウィンクとは言い難いが、本人はそのつもりなのだろう。

「どれどれ・・・。それじゃあ、読み終わったら連絡するから」
そう言うと大村は立ち上がり、2人に挨拶をして、部屋を出て行った。

「邪魔しちゃいましたか？」
「いや、そんなことないですよ。あ、座って、僕、さっきから何か飲みたくてね。
一人分だともったいないし、飲んでいって」
彼が相変わらずの笑顔で、再びコーヒーメーカーに手を伸ばすが、突然彼は手をひっこめた。

「あぁ、君は、コーヒー苦手だったね。紅茶パックは・・・あった、あった」
彼はコーヒーメーカーの近くに置かれた缶の箱からティーバッグを取り出し、
小さな棚から2つカップを取りだした。

（・・・え・・・？）
その手際の良さを、ただ茫然と見つめている。

「さっき、大村先生が褒めてくださっていましたよ」
「・・・へ？」
「先生に頼まれてね、君がこの前渡してくれた論文、先生がちょっと読みたいって」

やっと『つまみ食い』の意味を理解できた。
コーヒーメーカーから滴り落ちるお湯がたまるのを見ながら、彼が言う。

「面白いって。大村先生は論文に関してはあまり他人を褒めない方だから、これは期待できますね」

たまったお湯を、カップの中に注いで、彼はそれをそのまま彼女に手渡した。

「砂糖は要らないでしょう？」
「はい」

出来たての紅茶が、湯気を立てている。

真夏だと言うのに、こんな熱い紅茶を飲むことは自分ではないけど、林が淹れてくれたものだから、彼女にとってこんな嬉しいものはない。

「いただきます」

ふぅと少し冷ますために息を吐いて、彼女は口を付けた。

「・・・美味しいです」
「大丈夫？熱くない？」

とうの林は未だ口をつけていない。

「はい、大丈夫です。先生はホットコーヒー好きなくせに猫舌だから、毎朝温めで設定しているので」

「・・・」
「先生？」
「あぁ、いや、何でもない」
林は少し何かに呆気にとられていたようだったが、直ぐに話題を戻した。
「とりあえず、大村先生に気に入られると良いね」
林の笑顔に、彼女も笑顔で答える。
「はい。そうしていただけると本当に光栄です」
それから2人は軽く刑法の論点について言葉を交わした後、木幡は部屋を出た。
ぱたん、とドアを閉め、彼女は廊下を歩き始める。
しん、と静まり返った廊下。
もう、ほとんどの先生も学生も帰っているのであろう。
そんな中で、彼女は独り言を零す。
「・・・どうして先生、私がコーヒー苦手って知っているのだろう」
場所を事にして、それと同時に、独り言を零す人間がいた。
「どうして木幡さんは、僕がコーヒー好きで、猫舌って知っているのだろう」

雨の中で、再び。

――――それは、あまりにも突然だった――――

留学先で知らされた真実はあまりにも重く、悲しすぎた。

急いで帰国しても、間に合うはずがなかった。
でも、それでも何もしないではいられなかった。

久しぶりに踏んだ母国の土を踏みしめ、母国の素朴な空気を味わっているひ暇もなかった。

船を降りた後、彼は今にも張り裂けそうになる胸を抑えて、道を急いだ。

その道は帰路ではない。
たった一人、愛する人へと続く道だった。

何も考えられない。
頭の中は真っ白だった。

只一つ、言えることは、全てが、信じられない、と言う事だった。

胸が痛い。
それが走っていることからくる息切れ故なのか、
それとも悲しみ故なのに、彼には判別できなかった。

足の裏が焼けそうに痛い。
ぽつり、と頬に冷たい感触。
ぽつり、ぽつり、と最初の感覚から、続いて始まるそれらは、雨の降る合図だった。

（・・・降ってくれるな・・・）

彼の心の中の願いとは裏腹に、空はどんどん黒い雲に覆われていく。
そして、雨脚は、次第にその激しさを増していた。
しかし、彼は足をゆるめない。

傘もささず、彼は力の限り走るのだった。

そして、彼の目指す場所へあと少し、という所だった。

彼の体力は限界に近付いていた。

彼は立ち止り、壁に手を這わせ、膝を曲げる。
ぜいぜいと息をする口の中に、びしょびしょに濡れた髪の毛から滴り落ちる雨が入ろうとする。

頭を左右に激しく振って、もう一度頭を上げた、その時だった。

見慣れた車。
そして、傘の列。
列の中から、垣間見えた横顔。

「・・・待ってください！」

かすれた声で、彼は叫んだ。

しかし、その声は、激しく振り続ける雨音で掻き消されてしまう。
ふらふらした足取りで、彼は何とかその場へたどり着こうとした。
しかし。
ばたん、という音がした。
そして、エンジンがかかる音と同時に、排気ガスが宙を舞っている。
「・・・お願いです、待ってください！」
本来であれば、動くことなんかできないはずだった。
彼の足を動かしていたのは、気力以外の何ものでもない。
「待って、・・・待って、お願いだ、待って・・・！」
うわ言のように呟きながら、車の後を追う。
しかし、当然のごとく、車になど追いつけるわけがない。
どんどん遠ざかって、姿を消していく車を、彼は見つめながら、叫んでいた。

言葉にならない、叫びを。

それは全て、雨が掻き消してしまっていた。
彼は人目を憚らず、その場に膝から崩れ落ちて行った。

その顔は、ひどく濡れていた。

それが雨のせいなのか、それとも他の物のせいなのか、その区別はできなかったが。

「・・・どうして・・・」

ただ彼はそう一言だけ呟くと、その場に体を横たえた。

大の字になって、全身を雨に打たせた。

そう、したかった。

そうするしか、彼の悲しみを、誤魔化せなかった。

――何故、行ってしまったのですか――

「・・・っ！？」

がば、と体が反射的に起き上がった。

はぁはぁ、と肩で息をする。

胸に手を当てなくても分かるくらい、心臓がドキドキしていた。

額には汗が流れている。

暑さのせいではない。
夢のせいだ。

ベッドの隣に置かれた時計を見た。

まだ、朝の3時だ。

頬にそっと手を当ててみる。
涙の跡が出来ていた。

「・・・また、この夢でうなされるとは・・・」

そうこぼすように呟いて、彼はゆっくりとベッドの上に横たわった。
体を右向きにして横たわると、視線の先には、1枚の写真が飾られた写真立てがあった。

そこに映るのは、一人の美しい若い女性。
優しく微笑んで、彼を見つめているようだった。

彼も写真を見つめながら、その中の彼女に話しかける。

「・・・子供の様だと、君は言うのだろう?君が隣に居た時は、こ

んなことは無かったのだけど」

ふ、と彼は切なげに笑って、目を閉じた。

急激なまどろみに、彼は身をゆだねる。
瞼の裏に映るのは、無限の闇。
落ちていく眠りの深さに、彼は夢の続きを求めなかった。

初めての仕事。

「おはようございます」

朝、林が部屋を開けると、いつも通りに木幡が温めのコーヒーを用意してくれていた。

「おはよう」

彼はぼさぼさの髪を掻いて、眼鏡を直しつつ、散らかった机の上に鞄を放り投げた。

そして、そのコーヒーを口にする。

「美味しいな。いつもありがとう。

君の淹れてくれたコーヒーを飲むと、何だかほっとするし、元気が出る」

彼女は思わず俯いて、咄嗟にいつもの癖を出してしまった。

「いえ。だから修士論文の採点、甘くしてくださいね」

ははは、と彼は苦笑しながら、コーヒーを持って席へと着く。

机の上は、いつものように乱雑だ。

彼は何かを探す手を止め、目の前に立つ彼女に声をかけた。

「・・・木幡さん」

「はい？」

「君は・・・」

「・・・はい」

「・・・」

「・・・？」

何かを言いかかけたまま、彼は何も言わない。

只黙ったまま、彼女を見つめるのだった。

「・・・な、何ですか」

彼女がどもるのも不思議ではない。

話し掛けておいて、続きを言わずにただ見つめているのだから。

「いや、何でもない」

ふっと笑いを浮かべて、彼はコーヒーを再び口に流した。

「ちょっと今日ね、不思議な夢を見たものだから」

「不思議な夢？」

彼が苦笑交じりに答えた。

「もう３０を超える良い大人なのに、ここ、そうですね、２，３年、夢でうなされるんです」

「どんな夢ですか？」

「・・・良く分からないのです。僕は、誰かに何かをして欲しくなくて、大雨の中、その人を止めに行くのです。だけど、いつも失敗

してしまう。それが悲しくて悲しくて、胸が張り裂けそうな気持になるのです」

彼の顔は本当に悲しそうだった。
良く見ると、目の下にクマができている。

「不思議な夢ですね」
「えぇ。本当に。・・・いったい何の夢なんでしょうね」
彼はそう言い終わらないうちに欠伸をした。

元気づけたい、だけど、気の利いた言葉など咄嗟に浮かぶはずもなく。
時にそう言った葛藤は、人に、心とは裏腹の行動を起こさせることがある。

彼女も例外ではなかった。

「いつもぼけっとしている先生ですから、朝の授業ぐらい、しゃきっとしろって言う意味で、渇を入れられているんじゃないんですか？」

あまりにも脈絡のない根拠だったが、そんなものでも、彼は笑顔で応じてくれた。

「・・・ふふ。誰が、ですかね？」
「分かりません。亡くなった奥さまじゃないですか？」
「あはは。そうかもしれませんね」

彼がふっと見せた笑顔が、彼女の胸を苦しくさせる。
言うべきではなかった。
目じりにできた笑いじわが、ひどく切ない。
笑い皺が、必ずしも笑うからできるとは限らない。
泣いて顔をくしゃくしゃにしても、出来てしまうものだ。
その多さは、・・・そう、失ったものへの涙の数かもしれない。

彼女は、自分の心がひどく重く感じられた。

「あ、先生、今のは、・・・その」
「ん？」

気を使ってくれているのだろう、分からないふりをしてくれている。

「いえ、その。・・・ごめんなさい」
「突然どうしました？何がですか？」

彼女はただ頭を左右に振るだけだった。

どうにかしてこの気持ちを切り替えたいと思っていた時、今朝のある出来事がよみがえる。

「あ、そうだ。さっき大村先生に会って、林先生に伝えてほしいことがあるって言われたんです」
「ん？」
「何か、法学出版の方から執筆依頼が来ているから、後で部屋に来てほしいって」
「そうですか、了解です」

林は一気にコーヒーを喉に流しこむ。

空になったコーヒーカップを片づけるのは、木幡の仕事ではなく、彼の仕事だった。

「それじゃあ、失礼します」
「はい」

木幡はそのまま林の部屋を後にした。

昼休み。

院生の部屋でパソコンと睨めっこをしている木幡に、同じ院生が声を掛けてきた。

「さっき林先生に会ったんだけど、木幡さんを呼んできて欲しいって言われたんだ」

「私？」

直々に呼んでくれるとは。

恐らく判例や学説のリサーチか何かを頼まれるのだろうけど、
それでも嬉しくなってしまうのが、恋の魔法である。

今朝、彼に変な冗談を言ってしまって、会うのは気まずいか、と思ってはいたが、
どうやら彼女の気持ちはかなりタフらしい。

「もう、何なのかしら。私ばっかりこき使って」

でも、心とは裏腹に、言葉に出るのは悪態ばかり。
だけどその足取りは、非常に軽かった。

「先生」
「どうぞ」

ドアを開けると、林が難しい顔をして何かをじっと見つめていた。
やはり、少し緊張する。
彼女はドキドキしながら、彼の口から出る言葉を待っていた。

「あ、木幡さんですね」
「何か用事ですか？」
「ちょっとこっち来てもらえます？」

先生は顔を上げることなく、掌を上にして、人差し指だけでこっちに来るように合図する。
そんな仕草に、彼女は思わず赤面しそうになった。
たったこれだけの仕草に反応してしまうとは。

彼女は冷静さを装うため、すぐさま机の上に目を遣る。

机の上は、朝より大分荒れている。
こんな状態で、どこに何があるのか分かるのだろうか、そう疑問を抱かざるにはいられないぐらいに散らかっている。

そう思えば、先生が片づけの出来ないという欠点を直視することが

出来て、いくらか冷静になれると思ったからだった。

「大村先生の直々のお願いです」

「何ですか？」

彼に手渡された、Ａ４の１枚の紙。

「・・・執筆依頼・・・え、私に？大村先生の仕事じゃなくて？」

「どうやら大村先生が頼まれたそうなのだけど、僕と君にやって欲しいらしくてですね。先生曰く、こういうのは若い人間がやった方が面白いとおっしゃっていて」

「えーっと。・・・過去の著名な刑法学者・・・既に亡くなっていらっしゃる方をメインに、その人物像を紹介する特集を組む予定です。先生の性格、エピソードを交えつつ紹介をしてください。つきましては、お好きな刑法学者をお選びいただき、ご連絡をいただきたい・・・って、これ、私が書くんですか！？」

「初雑誌デビューですね、おめでとうございます」

法学出版は、法律雑誌を出版している会社である。

法学部の学生であれば、一度は耳にした事がある、老舗の出版社だ。

「で、でも、どうして私なんかが・・・」

未だ院生の2年生という身分であるにもかかわらず、何故自分が抜擢されるのか、彼女は分からなかった。

「僕も分かりませんが、もしかしたら、君の論文が大分気に入っているのかもしれないですね。今朝も、君の文章能力を褒めていらっしゃいましたよ」

にこにこ笑いながら、林はそう言った。

「どうやらそこに書かれている刑法学者の中から一人選んでほしいとのことです」

指差されたところに、何人かの名前がリストアップされていた。

刑法を勉強した者であれば、必ず避けて通れない人たちの名前がずらり、と並んでいる。

「僕は牧宗一郎を選ぼうと思っていますが、木幡さんはどうしますか？」

牧宗一郎。

日本の刑法を、「学問」のレベルまでに持ち上げた刑法学者の一人だ。
ドイツからの輸入品でしかなかった真似事の刑法を、日本独自の学問分野として、確立させたその功績は大きい。
また、その大らかで優しいという性格もよく知られており、戦争に最後まで反対をしていた著名人としても名を上げられる人物である。

ふと、牧宗一郎の下に書かれた名前が目に付いた。

「・・・藤木壮介・・・」

藤木壮介。

彼も刑法学会では著名な刑法学者だ。
一部では「天才」という称号まで与えられている。
誰もが目につけない観点から物事を把握し、常に時代の最先端を駆け抜けた人だ。
もっとも、先見の能力は、周囲に理解されがたく、時にその考えが過激すぎるとして批判の的になることはしばしばあった。

確か、・・・戦時中は、政府に目を付けられてしまい、論文の発表がほとんどできなかったと聞く。
また、戦後は戦後処理の渦に巻き込まれ、数多の人々の批判の対象とされ、研究発表が難しかったそうだ。

「・・・先生は、藤木先生にしないのですか？」
「うーん。悩みましたけどね。ここはあえて刑法の原点に戻って、牧先生にしようかな、と」

他にも、立法分野で貢献した野村教授などの名前もあがっていたが。

「それじゃあ、私、藤木先生にしようかな」

彼女は、とても軽い気持ちで選んだ。

「良いと思いますよ」

しかし、はて、と思い直す。
牧先生はかなりの著名人で、その逸話も多い人だ。
若い頃、仲間の学者が当時の政府の体勢を批判した論文を発表し逮捕されたことに抗議して、
辞職願を提出した、という話は、今でも語り継がれている。

しかし、藤木教授の逸話はあまり耳にしない。

確かに、刑法の論文を彼女も多少かじったことがあるし、彼の着眼

点は、当時からすれば、かなり斬新だったことは明らかである。
彼の論文は、現在の刑法にも通ずる事があり、彼の学説を勉強せずには通れない分野も存在する。

しかし。

「・・先生、藤木先生って、何か逸話とかあるのですか？」

その問いに、林も困ったような顔をした。

「・・・うーん。学説は頻繁に発表されていたみたいだけど、そういう話は、僕は聞いたことないですねぇ」

かなり困難な選択をしてしまったようだった。

一瞬止めようとも思ったが、彼女の素直ではない性格が、こういう時に災いする。
一度決めてしまったものを変えるというのは、彼女の性格が許さない。

「・・・とにかく、基本書でも読んでみます」

修士論文よりも難しいかもしれない仕事を引き受けてしまったような予感がしていたが、
とりあえず彼女は林の部屋を出て、自室へ戻るのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0093n/

コ　ト　ノ　ハ

2010年10月13日05時12分発行